広報 留萌 1991 3 No.396

特集 ご存じですか……。個人住民税のしくみ

◆連載 いま留萌むかし 第五十一話

●山丹交易とコタンピル

江戸時代中期ルルモッペのアイヌの首長コタンピルは竜の刺繍文様の入った豪華な絹製の衣服を着用していた。これは山丹服、蝦夷錦、捨徳、サンタチミップと呼ばれる。

この衣服は留萌と中国南部の蘇州や杭州と繋がりがあったことを物語る資料なのである。というのは、この山丹服はもとをただせば中国南部の蘇州や杭州で織られたものなのである。

では、どのようにしてこの服が留萌まできたのであろうか。直接、中国南部と留萌が取引があったわけではない。実を言うとサハリン（樺太）経由で北海道に入ってきたものなのである。

このサハリン経由の北方からの交易ルートははるか昔からあったことが分かっている。今から一万年以上昔、まだ、氷河時代だったころシベリア大陸からサハリンを経由して旧石器時代の人間たちが北海道にやってきた。また、石器を作る材料である北海道の黒曜石（十勝石）が、シベリアの遺跡から出土する。この、古くからの交易ルートがずっと近世まで続いており、山丹服も運ばれてきたのである。

江戸時代になると、江戸幕府は外国との貿易を長崎でしか行わないという鎖国政策をとった。しかし、この北方ルートを通じての交易品が本州に流入していたのである。そして、この交易を担ったのは北海道アイヌの人たちや樺太アイヌの人たちを含む北方の少数民族たちであった。

中国の明や清は北方諸民族を懐柔支配するために、朝貢交易を盛んに行った。アムール川（黒竜江）周辺の諸民族に対しては、アムール川の下流域に交易場所を設置し、彼らの産する毛皮との交易を実施している。このアムール川下流域を山丹と称していたために山丹交易の名前が生まれたのである。

文化四年（一八〇七）に樺太から間宮海峡を経て大陸へ渡った間宮林蔵はこの交易所を訪れている。清の北京政府は中国南部で作らせた織物などをこの仮の交易所へ運び、少数民族と交易を行い、この中のギリヤークの人たちなどがこれを持って樺太にやってくる。そして、樺太アイヌの人たちと交易し、それを北海道アイヌの人たちと交易するのである。これが当時の松前藩の手を経て本州に入っている。

また、この山丹服は北海道アイヌの人たちのなかでも有力者層に着用され、アイヌの人たちも中でも権力のシンボル的なものとなっていたようである。ルルモッペでも有力者であったコタンピルが着用していたのも不思議ではない。

この他に山丹交易の重要な品として青玉（虫巣玉）とよばれたガラス玉、キセル、鷲の羽、毛氈や綸子などの織物類がある。

コタンピルの肖像画を見るにつけその身につけているもののなかにこの山丹交易で得たものが多く見られ、彼もこのルートの重要な担い手であった可能性が強い。なぜなら、彼の家系は西蝦夷地でも名家であり、裕福だと古書に散見するからである。

山丹服を着用したコタンピル

平成3年3月／発行・留萌市
編集・企画 振興室
印刷・白鷗印刷株式会社